

# Newsletter

No.52

DECEMBER 2014



カレドニア(CALEDONIA)はスコットランドの雅名  
その国花は薊(あざみ)

## ボズウェル文書の行方

諏訪部 仁

James Boswell (1740-95) といえば『ジョンソン伝』(1791)の作者として知られているが、彼が類のない「記録者」でもあったことは近年になってから徐々に明らかになったことである。そして、記録を残すことへのすさまじい執念を実証する彼の書き綴った文書——日記、手紙、草稿、メモ、等々の所在が明らかになっていく過程もまた、その内容に劣らず興味深いものであることはそれほどには知られていないようだ。

その驚くべき一連の発見談の幕開けは、フランスのドーヴァー海峡に面した港町ブローニュ・シュル・メールである。1840年頃、東インド会社勤務のストーン陸軍少佐がとある食料雑貨店で買い物をしてその包み紙にボズウェルという名前を見つけ、興味を覚えて残りの包み紙を全部買い取った、ということが事の発端であった。その紙は実はボズウェルが生涯の友テンプルに送った手紙であり、全部で97通あった。これは近くの町に住む商人から店の女主人が買い込んだもので、ほぼ半数はすでに使われていたということだった。この手紙がどうして異国の田舎町で発見されたのか——手紙の受取人であるテンプルの娘婿が借金のがれにイギリスからこの地に移って来て、苦し紛れに処分した義父の遺品の一部だと分かったのは後のこと。こうして、ボズウェルが真情を前後47年にわたって親友に書き綴った書簡群はやがて『テンプルへのボズウェルの手紙』として1857年に公刊されることとなった。

次の舞台はアイルランドのダブリン郊外、マラハイド城である。ここに嫁いでいたボズウェルの曾孫エミリー(トールポット男爵夫人)は、直系の男子がいなくなり、姉も1905年に亡くなったためボズウェル家の遺産を継ぐこととなり、スコットランドはエアシャーのオーキンレックから遺産を海を越えてこの城に運び込んでいた。その遺品の中に家宝として代々ボズウェル家に伝わっていた「黒檀のキャビネット」があり、その引き出しの中にボズウェルの書き残した文書がぎっしりと詰まっていた。それがいつしか噂となって、これに関心を示した学者やコレクターがこの城の門を叩くようになった。その内の一人に、アイシャム中佐という英国陸軍に勤務したアメリカ人がいた。彼はイェール大学でジョンソンやボズウェルについて学び、その魅力に取りつかれていた青年実業家であった。彼はその財力と熱意を傾けて当時の6代目トールポット男爵夫人を説得し、その文書類を手放させることに成功した。その後、クローケー用具入れの木箱や納屋の屋根裏からも文書の一部が見つかることなどもあって、『アイシャム中佐の蒐集になるマラハイド城か

らのジェイムズ・ボズウェルの手記』(1928-34)が自費出版された時には大型本で全18巻にもなっていた。

ところが、その後(1930年頃)スコットランドはハイランドのフェッターケルンで新たに別のボズウェル文書が発見されたというニュースが世間を驚かせた。この文書類は、ボズウェル文書の管理執行人の邸宅の最上階に2世紀以上もその存在を忘れられて眠っていた、いわば「返し忘れた預かり物」であり、全く別の調査研究のためにここを訪れていたアバディーン大学のアボット講師が図らずも発見したものだ。この文書の中には、後にアメリカでベストセラーになった『ボズウェルのロンドン日記 1762-63』(1950)などもまじっており、その量はマラハイドの約半分ほどであった。(後日、この文書も所有権をめぐる長い裁判を経て、アイシャム中佐のものとなった)。

こうして膨大なボズウェル文書もその長かった分散の時間を越えて、今はイェール大学図書館に収められ、その「リサーチ・エディション」が総計40冊余りの完成を目指して刊行中である。長くて波乱に富んだボズウェル文書の物語もこれで大団円の筈だったが、さらなる意外な後日談が待ち構えていたのだ。

次なる舞台はイングランド、オックスフォード大学のボドリーアン図書館。2008年からここで「スコッツ語」研究に没頭していた当時ダンディー大学の研究員であったスーザン・レニー博士が『スコッツ語源辞典』(1808)の著者ジョン・ジャミーソンの旧蔵書のなかに紛れ込んでいたボズウェルの「スコッツ語辞典」の草稿を見つけたのだ。ボズウェルがこの辞書の編纂を夢想していたのは周知のことだったが、「私の暇な時間の仕事」と言っていたようにその完成がほとんど不可能なことも明白だった。ただ、その草稿が見つかることは絶望視されていたので、39枚、約800語にすぎない走り書きであっても貴重な記録であり、同博士によるこの草稿の研究結果の刊行が目下待たれている。(元中央大学教授)



## ロマン派期スコットランドの妖精譚： ウォルター・スコット『最後の吟遊 詩人の歌』とジェイムズ・ホッグ 『女王の祝祭』

吉野 由起

ブリテン諸島で語られ書かれた妖精譚の系譜を辿ると 19 世紀スコットランドは際立った個性を放つ。個人に創作された妖精像・物語が豊饒に溢れ、ロマン派期妖精譚の前衛性とヴィクトリア朝期妖精物語の陰翳を帯びた絢爛の成す対照を縫い、「歌よみトマス」(‘Thomas the Rhymer’)等バラッドの借用が経糸のように見え隠れする。グリム兄弟のドイツ民話収集と連動或いは先行しバラッド収集が展開したロマン派期に、様々なジャンルを横断・混成し創作された妖精譚には、「発見」されたバラッドが新鮮な刺激として文人たちを魅了した痕跡が残る。主題・モチーフ等内容の次元に留まらず、ロマン派期芸術家の意識に少なからぬ比重を占め実験・再創造が繰り返されたとされる、ジャンル<sup>i</sup>という形式面でも、バラッドは多大な影響を与えた。

ともにボーダー地方バラッド収集に関わったスコットとホッグは極めて実験性に富む妖精譚を創り出した。スコットが『最後の吟遊詩人の歌』(*The Lay of the Last Minstrel*, 1805)で描いた妖精ギルピンは、‘Lost!’ という台詞によって姿を消す。自らの方向性を喪失し、近代人の肖像的な妖精造型としての斬新性を秘める。

ホッグの『女王の祝祭』(*The Queen's Wake*, 1813, 1819)は、エリザベス一世に捧げられた『妖精の女王』(Spenser, Edmund. *The Faerie Queene*, 1590, 1596)を意識した叙事詩的枠組みと、女王メアリの宮廷でスコットランド各地の吟遊詩人が競演する歴史的設定・デカメロンの構成の多声的重層のもと展開する神話的な装いの作品である。妖精が無数に配置され夢想化されたスコットランドの風景の俯瞰描写に始まる冒頭部、女王メアリ登場場面では史実との呼応と逸脱、さらに「歌よみトマス」の反響がこだまする。<sup>ii</sup>『妖精の女王』に画き込まれたスペンサー自身の「詩人の自意識」<sup>iii</sup>に代わり、『祝祭』では「複数の詩人の仮面の使用」<sup>iv</sup>を通して、虚構的な神話創造に耽るエトリックの詩人の自画像が多面的に提示される。

(三重大学)

<sup>i</sup> Duff David. *Romanticism and the Uses of Genre*. Oxford: Oxford UP, 2009.

<sup>ii</sup> Dunnigan, Sarah. ‘Hogg, Fairies, and Mary Queen of Scots’. Paper Presented at Hogg Conference. Stirling: U of Stirling. Aug 2007.

<sup>iii</sup> Woodcock, Mathew. *Fairy in The Faerie Queene: Renaissance Elf-Fashioning and Elizabethan Myth Making*. Aldershot: Ashgate, 2004.

<sup>iv</sup> 高橋和久『エトリックの羊飼いや、或いは、羊飼いのレトリック』(研究社、2004)

われた。休憩をはさみ、諏訪部仁氏による記念講演「ボズウェル文書の行方」が行われた。歴史資料をふんだんに駆使した大変興味深いご講演をいただいた。

夕刻、同館7階ラウンジに会場を移し、なごやかに懇親会が開催され旧交を温めることができた。

二日目、研究発表、浦口理麻氏「SNSの使用状況から探る独立賛成派、反対派のキャンペーン戦略」、中尾正史氏「スコットランド議会と政府の言語教育政策の動向—スコットランド議会成立からの15年間—」につづき、総会が開催された。午後にはシンポジウム「スコットランド～文学・演劇・社会学から捉えなおす～」が行われ、谷岡健彦氏「潜水艦から見るスコットランド」、松井優子氏「モダニスト・ルネサンス、分権小説、文化的転回—現代スコットランド文学と三つの契機—」、香戸美智子氏「現代社会におけるスコットランドと英国—社会的視点から—」はいずれもスコットランド独立をめぐる最新の動向を盛り込んだ充実した報告であった。先川暢郎幹事から閉会のあいさつがあり、多数の参加者を得て開催された日程を終了した。

今年度大会開催にあたり、関係者各位には多大なるご協力をいただきました。深く感謝申し上げます。

(坂本恵 記)

## ◎研究発表要旨

### バラッドに隠された、生きていくための教訓

山崎 遼

バラッドとはヨーロッパ各地で広く伝承されてきた物語歌である。その歌い手たちは、歌の中に「生きていくための教訓」を込めてバラッドを歌い継いできたと考えられる。

本発表では、歌の中で描かれる「死」と「異界の住人」の描写に着目し、バラッドが仄めかす人生の教訓に迫った。殺人・自殺バラッドの登場人物は、身分的に相容れない相手と結婚しようとした結果、悲劇的な死を遂げることが多い。結婚や性に関するトラブルを避けるには、立場をわきまえて恋人を選択するべきだとバラッドは仄めかしている。また、幽霊バラッドの死者は、悲しむ生者との関係を様々な方法で断ち切ろうとし、愛する人に先立たれた者がその死をどう乗り越えていくべきかを聴き手に伝えている。一方で、妖精バラッドは幻想的且つ危険な妖精界と人間との交流を描き、聴き手を現実から一時的に逃避させてくれる。人々は現実と折り合いをつけながら上手に生きていく術を歌の中で伝えてきた一方、現実から逃避させてくれる歌も歌い継いできたのである。

(立命館大学大学院)

### ゲール語を教授言語とする初等教育の現状

米山 優子

全ての教科をゲール語で教授する小学校 Bun-sgoil Shlète (スカイ島)、Bun-sgoil Ghàidhlig Inbhir Nis (インヴァネス)、Sgoil Ghàidhlig Ghlaschu (グラスゴー)、Bun-sgoil Taobh na Pàirce (エディンバラ)の特徴や独自の取り組みについて報告した。保育学校の併設や、伝統的な器楽演奏のようにスコットランド文化を重視した教育などが共通点として挙げられる。インヴァネスとグラスゴーの小学校には中学校が併設されているが、中・高

## ◆2014 年度全国大会報告

2014 年度の大会・総会は日本スコットランド協会の協賛のもと、2014 年 10 月 4 日(土)、5 日(日)に拓殖大学文京キャンパス C 館 301 号教室で開催された。開会式では、櫻井雅人代表幹事、拓殖大学高橋敏夫学長・大学院長、NPO 日本スコットランド協会高橋愛朗代表理事にご挨拶いただいた。つづいて、山崎遼氏「バラッドに隠された、生きていくための教訓」、米山優子氏「ゲール語を教授言語とする初等教育の現状」の研究発表が行

等教育と連携して学習を継続させるためにも、教員の養成と確保は大きな課題である。教材や設備の水準に関しては、スカイ島以外の学校の方が充実していた。特にグラスゴーなどハイランド以外にもゲール語文化圏が広がり、保護者自身はゲール語話者ではない場合もあるが、ゲール語を通じた教育の需要は確実にあると言える。(静岡県立大学)

## SNSの使用状況から探る独立賛成派、反対派のキャンペーン戦略

浦口 理麻

本発表では、独立をめぐる住民投票のキャンペーンにおいて Twitter が重要な役割を果たしたことに着目した。発表の前半では、賛成派と反対派の Twitter におけるキャンペーン戦略を分析し、「反対派の Better Together は具体的なビジョンを示すことはせず、賛成派の主張の弱点を批判し、独立後の社会が上手くいかないことを脅しのような形で主張する一方、賛成派は未来志向を前面に出しポジティブさをアピールし、反対派を揶揄する際にもそこで必ず自分たちの考えを示すことを忘れなかった。そして情報がどんなメディアよりも早く/速く広まる Twitter の特性を生かして、オンライン上で積極的な草の根運動を行った」という結論を出した上で、それが世論にどのような影響をもたらしたのかを考察した。

発表の後半では、Twitter の分析をもとに、「賛成派はこの運動を民主主義的なものと捉えていたこと、そしてキャンペーン自体は、排他的というよりも包括的なものであり、国への愛や帰属意識ではなく、どのような社会を作りたいかという信念こそがこの運動の土台であったこと」を明らかにした。(東京学芸大学)

## スコットランド議会と政府の言語教育政策の動向 —スコットランド議会成立からの 15 年間—

中尾正史

「2005 年スコットランド・ゲール語法」(Gaelic Language (Scotland) Act, 2005) が成立したことにより、ゲール語委員会とも言うべき団体「ポー・ナ・ガーリック」(Bòrd na Gàidhlig) が「ナショナル・ゲール語プラン」を策定することとなった。

2007 年に作成された「ナショナル・ゲール語プラン 2007～2012」(National Gaelic Language Plan 2007～2012) では今後どの程度までゲール語話者数を増加するかという目標が示された。第二期として、2012 年に作成された「ナショナル・ゲール語プラン 2012～2017」(National Gaelic Language Plan 2012-2017) では Key outcomes として、Home and Early Years, Education: School & Teachers, Education: Post-school Education, Communities, Workplace, Arts & Media, Heritage & Tourism, Corpus が挙げられている。

ポー・ナ・ガーリックの指導のもと、大学、地方行政区、観光団体などが「ゲール語プラン」(Gaelic Language Plan) を作成しているが、2018 年 9 月時点で、提出したゲール語プランが認可された団体は 36 団体であり、それぞれの立場を反映させたものとなっている。

(青山学院大学)

## ◎シンポジウム要旨

### スコットランド ～文学・演劇・社会学から捉えなおす

今年のシンポジウムは、連合王国からのスコットランド独立の是非を問う住民投票が行われることから、スコットランドの現在を捉えなおし、その最新の動向を盛り込んだ報告があった。

## 研究ファイル

### 続・『前触れ』\* と「第二の視覚」

木原 翠

2014 年第一回研究会においてジョージ・マクドナルドの『前触れ』について発表させていただいた。その中で扱った「第二の視覚」(セカンド・サイト)というモチーフについて、ここで改めてもう少し詳しくまとめてみたい。「第二の視覚」はスコットランドの特にハイランド地方に伝わる俗信で、様々な文学作品に題材を提供してきた。

『スコットランドのゲール世界ハンドブック』によると、「第二の視覚」とは予知能力の一種で「祝福ではなく頼んでもいないのにやってくる呪い」であるが、原始社会の人々によって「未来の出来事や遠くの物事についての知識」を求めたための拠り所とされた。予知される事象としては地域社会の人々の死といった不幸から、旅人の来訪が予告されるという吉兆などがある。サミュエル・ジョンソンは『スコットランド西方諸島の旅』\*\* の「スカイ島オスティグ」の章で、「第二の視覚」とは「遠くのまたは未来の事象」が心に浮かんで見えることであると定義し、故郷を遠く離れた男が落馬して負傷する様子を同郷の男が見るといふ例を最初に挙げている。これと似たようなイメージとし

て主人公が落馬して失神するヴィジョンを『前触れ』における予知能力を持つ老婆が語っている場面があるため、マクドナルドはこのジョンソンの記述を読んでいたかもしれない。ジョンソンは他の幻視として「結婚式や葬式の行列が突然目の前に現れる」ことや、「楽しい出来事」としてある紳士の従者の仕着せを故郷にいた召使いが描写するという事例を挙げている。

上記のように「第二の視覚」は必ずしも不吉なものだけではないが、『前触れ』においてマクドナルドは敢えて恐ろしい面を利用し、主人公の命を奪おうと脅かす悪霊が乗る馬の足音というゴシックロマンス創作のための繰り返しのモチーフとして描いている。一度はこの死の予兆が現実のものとなりかけ、不運に見舞われてイングランドの屋敷を追われ兵士として外国を放浪していた主人公ダンカンはある日、先端の赤い雛菊の花 (red-tipped gowan) を見た時、突然強い郷愁の念が湧き一時的に帰郷する。ダンカンは「一杯のウィスキー抜きでは完結しない」ハイランドの朝食を取り、生まれ故郷の昔住んでいた場所を眺める。やがて彼は正気が戻った妻のアリスと、スコットランドであったかも憑きものが落ちたかのように平凡で穏やかな生活を送るところで物語は幕を閉じる。(東京大学大学院)

\* 『前触れ』の日本語タイトルは相浦玲子氏の訳による。

\*\* この文献については江藤秀一氏の指摘に負っている。

## 潜水艦から見るスコットランド

谷岡 健彦

20 世紀初頭の 아일랜드 の独立に際しては、演劇がナショナリズムの醸成装置として機能したと、よく言われているが、今回のスコットランドの住民投票をめぐっては、演劇は、分離独立を求める動きがたんなるナショナリズムの発露ではないことを示していたようである。現在のスコットランド演劇界をリードする二人の David のうち、David Greig は、*The Letter of Last Resort* という短編で、クライド海軍基地を母港とする四隻の原子力潜水艦のミサイルに依存する連合王国の核抑止戦略が、いかに不条理なものであるかを風刺していた。一方、もう一人の David Harrower の *Good with People* は、クライド海軍基地が周辺地域の住民に及ぼす影響に光を当てている。基地の核兵器は、住民たちの間に亀裂を持ち込み、大人のみならず子供同士の間でも暴力事件を誘発していたのである。このように、原子力潜水艦にまつわる二編の戯曲から見えてくるのは、基地を押しつけられているスコットランドと中央政府との非対称な関係であり、今回の住民投票の争点のひとつを明確に浮かび上がらせている。(東京工業大学)

モダニスト・ルネサンス、分権小説、文化的転回  
—現代スコットランド文学と三つの契機—

松井 優子

本報告では、現代スコットランド文学やその研究動向について、20 世紀前半のモダニスト・ルネサンス期、1979 年の住民投票、および 1999 年の議会再開という三つの重要な契機を中心に考察した。20 世紀前半には、ブリテン全体における文学伝統再編の一環としてスコットランド文学の概念が明確に立ち上げられていったが、以降の文学・文化研究には規範的排他性という弊害もみられた。一方、このルネサンス期以降、2014 年の独立を問う住民投票実施までに著された「分権／独立小説」十数作は、現実の独立論議の一部を構成しつつも、文学ジャンルとして独自の特徴をもつ。その一つ、女性の不在は従来の文学史にもみられたものの、1979 年の住民投票後の文化的自律性の確立や文化活動の多面化を経て、1999 年代以降、スコティッシュネスの複数化とともにルネサンス期の批評傾向の歴史化や相対化も進み、文学研究は現在新たな段階に入っている。発表では、この多文化的スコットランドの想像の問題点と可能性について、それぞれルネサンス期と 1997 年に出版された小説二作品の描き出す住民の姿に言及して結びとした。(青山学院大学)

現代社会におけるスコットランドと英国  
—社会学的視点から—

香戸 美智子

本発表においては、この度のスコットランド独立住民投票(2014.9.18)を視野に入れ、主に 20 世紀後半から 21 世紀にかけてのスコットランドの自律性をめぐる議論、住民投票(referendum)や権限移譲(devolution)を中心とした変遷について社会学の立場から考察した。まず、20 世紀戦前戦後の時代変化を踏まえ、1960・1970 年代の油田発見から最初の住民投票、SNP の動向を確認し、次に、1980 年代のサッチャー政権のもとでのスコットランドの位置を、彼女の政策を通し検討した。特に、英国として

の国家論や devolution の異なる使用法を指摘した。続いて 1997 年以降 21 世紀にかけてのブレア政権から始まる権限移譲政策や議会の実現以降を辿った。上記を国内的社会環境とする一方、国際的な環境として、グローバル化や EU (欧州統合) の成立と発展、国連機関による言語を含む文化権の保護や主張などを捉え、現代における国家概念の変容を背景として結論付けた。

(京都外国語短期大学)

## ◆2015 年第 1 回研究会

日時: 2015 年 1 月 24 日 (土) 15:00 ~ 16:30

場所: 拓殖大学 茗荷谷校舎 C 館 302 教室

(東京メトロ・丸ノ内線 茗荷谷駅下車、徒歩 5 分)

発表: 佐藤貴美子氏 (青山学院大学)

論題: バラッドを文学に —サー・ウォルター・スコットの試み

\*論題が「バラッドを文学に—サー・ウォルター・スコットの試み」に、変更となりました。

## ◆NPO 日本スコットランド協会(JSS)

◇「マッサン展を見に行く会」

日時: 1 月 24 日 (土) 13:00 ~ 15:00

場所: 外務省外交史料館別館展示室

(東京都港区麻布台 1-5-3)

案内役: 高橋周平氏 (外交史料館館長、元・在スコットランド総領事)

◇NPO 日本スコットランド協会 30 周年記念

「ハワット家のコンサート&amp;スコティッシュ・デイ 東京」

日時: 2 月 14 日 (土)

場所: 銀座クラシックホール (銀座ライオンビル 5 階)

◇スコティッシュ・デイ関西

日時: 2 月 21 日 (土)

会場: 神戸外国倶楽部

(兵庫県神戸市中央区北野町 4 丁目 15-1)

◇第 3 回関西茶会倶楽部

日時: 3 月 29 日 (日)

場所: 神戸外国倶楽部 (住所は上記を御参照下さい)

講師: 蓑輪陽一郎氏

\*お問い合わせは、日本スコットランド協会まで。

TEL/FAX: 03-6380-5256

E-mail:

## ◆日本ケルト学会

◇東京研究会

日時: 1 月 24 日 (土) 14:30 ~ 17:30

場所: 慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎 2 階小会議室

報告者: 梁川英俊氏 (鹿児島大学)

論題: 5 世紀のブルターニュのバルドは実在したか?

—『バルザス=ブレイス』の「グウェンフランの予言」をめぐって

問い合わせ: 辺見葉子氏

## 日本カレドニア学会 Newsletter 第 52 号

2014 年 12 月 20 日発行

編集発行人 日本カレドニア学会代表幹事 櫻井雅人

<http://www.ne.jp/asahi/caledonia/jcs/>

事務局 拓殖大学八王子キャンパス先川暢郎研究室

〒193-0985 八王子市館町 815-1 (A517)

Newsletter 編集担当 江藤秀一、野口英嗣、米山優子

(連絡先) 〒305-8571 つくば市天王台 1-1-1 筑波大学

江藤研究室 TEL 029-853-4127